GS～ガンダムシステム

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＧＳ～ガンダムシステム

【Ｎコード】

Ｎ３４３５Ｙ

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

これはもし束さんが開発したのがＩＳじゃなくてガンダムだったら…。というお話です。登場する機体はガンダムだけです。１１／１０　ゼロさんのアイデアにより、訓練機はふつうのＭＳにします。後々登場させますので期待してください。

EPISODE1（前書き）

カオス物が好きな主が作った作品ですごゆっくりどうぞ。

EPISODE1

少年織斑一夏は困惑していた。その理由は…。
（覚悟していたがきついな…。俺以外みんなクラスメイトが女子なのは…。）
ＧＳ（ジーエス）。正式名称ガンダムシステムは本来女性のみ扱える兵器だった。しかし、彼は男性で唯一ＧＳを起動させたため、国立ＧＳ学園に強制入学させられた。
そう。彼が今いる場所こそが国立ＧＳ学園だ。今教卓の前で副担任の山田先生があれこれ説明をしている。他の生徒はそんなのお構いなし、とばかりに俺に視線を注いでいる。
ふと視線を左にやるとそこには幼なじみの篠ノ之箒がいた。俺の視線に気づくとふいっとそらされてしまった。
（箒…助けてくれよ…。）
そんな事を考えていると教室の扉が開いて一人の女性が入ってきた。ん？この威圧感、つり上がった目、もしかして…。
「関羽！？」
べしっ！！
「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者。」
おもいっきり出席簿で叩かれた。ちきしょう、痛てぇ…。こんな力、まるで千冬姉…、
あれ？千冬姉の声にどことなく…。
「織斑先生、会議は終わられたんですか？」
「あぁ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてしまってすまないな。ごほん！！諸君！私が担任の織斑千冬だ！諸君らを一年で使い物にするのが私の役目だ。教師の言ったことは覚えろ！！覚えられなく

ても覚えろ！！」
絵に描いたような鬼軍曹。これが俺の姉の織斑千冬だ。第１回ＧＳモンド・クロッゾ大会で無傷での優勝を成し遂げた最強の称号「ブリュンヒルデ」を持つ姉。弟としては微妙な立場だ。
自己紹介も無事終わり、（頭部負傷者一名）二時間目までの休憩時間となった。
「ちょっといいか？」
その声の方を向くと…、
「箒…。」
幼なじみが立っていた。

EPISODE1（後書き）

どうでしたか？戦闘はもう少し先です。

DATE　FILE（前書き）

この作品に関しての設定です。知りたい事がありましたら気軽に質問してください。

DATE FILE

DATE FILE（データファイル）

1．GS（ジーエス）

正式名称ガンダムシステム。操縦者に合わせてサイズは変化する。装着時は見たまま

該当するガンダム。篠ノ之束博士が開発した。女性のみ扱える設計となっている。

2．登場人物

織斑一夏（おりむらいちか）

世界で唯一GSを動かせる男性。試験会場にあった訓練GS「RX－78－1」を起動させてしまい、国立GS学園に入学することになる。自覚無しに女性をときめかせている。 極度の唐変木だが徐々に…。GSの操縦になれるにつれてとある力が…。

専用GSは「エクシア」。

篠ノ之箒（しのののほうき）

一夏のファースト幼なじみ。小学校の頃、自宅の剣道場に通っていた一夏と稽古を共にしていた。心底一夏に惚れている。姉がGSを開発したため、小学4年の時に一夏と別れる。

専用GSは無し。

織斑千冬（おりむらちふゆ）

一夏の姉にして担任の教師。第01回世界GSモンド・クロッゾ大会を無傷で優勝した

過去を持つ。冷たい態度を一夏にとっているが心の底では一夏を気にかけている。

現役時代のＧＳは「オー」。

セシリア・オルコット
イギリス代表候補生。学園入試を主席で通過。自画自賛の傾向があり、あまり好まれる性格ではない。
専用ＧＳ「ケルディム」。

鳳鈴音（ファン リンイン）
中国代表候補生。一夏のセカンド幼なじみ。箒と同じく一夏に惚れている。
専用ＧＳ「アルトロン」。

シャルル・デュノア
フランス代表候補生。第二の男性ＧＳ装着者としてＧＳ学園に転入してきた。そんな彼には秘密が…？
専用ＧＳ「ヘビーアームズ改」。

白枝一馬（しらえだ かずま）
本作オリジナルキャラ。日本代表候補生。第三のＧＳ装着者としてＧＳ学園に転入。彼がＧＳを扱えるようになったのにはある人物よってらしい…。
専用ＧＳ「ユニコーン」。

更識簪（さらしき かんざし）
一馬と同じ日本代表候補生。あまり目立ってはいなかったが一馬によって…。
専用ＧＳ「ストライク」。

DATE　FILE（後書き）

新キャラが登場したら随時ここに簡単な紹介文を載せていきます。

EPISODE2（前書き）

EPISODE2です。どうぞ。

EPISODE2

ここはＧＳ学園屋上。他の女子生徒を振り切って俺と箒は屋上にたどり着いた。
「久しぶり。六年ぶりだな。」
「あぁ…。」
六年ぶりに再会した箒は以前よりも鋭さが増している。でも結構可愛くなったかも…。
「そういえばさ。」
「？」
「剣道全国大会優勝おめでとう。」
「な、何故お前が知っている！？」
箒は相変わらずの口調でそう言った。昔からこいつは男勝りな口調だったな。まぁ、それはそれで人の個性だけどな。
「何故って、実際に会場で観戦したからだよ。」
「なら一言くらい声をかけてくれれば良かったのだが…。」
箒は残念そうな口調でそう言った。
「だってさ、千冬姉に言われてたんだよ。試合が終わったら即座に帰れ、って言われてさ。
ほら、お前も知っているだろ。千冬姉に逆らうと…。」
箒の表情が徐々に凍り付く。
「あぁ…。なら仕方ないな。」
二時間目のチャイムが鳴る。
「やばっ！戻るぞ。」
「あぁ！」

全力疾走で教室に戻る一夏と箒。
「そういえばさ箒。」
「？」
「可愛くなったな…／／／」
「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！！！」
教室に戻った俺達は千冬姉の出席簿アタックを喰らったのであった。

EPISODE2（後書き）

次はあの貴族様がご登場です。

EPISODE3（前書き）

ＥＰＩＳＯＤＥ３です。この話の中にでてくる表現はｒｉｈｉｔｏさん作「ＩＳ［インフィニット・ストラトス］　ＷＨＩＴＥ　ＢＬＡＤＥ　＆　ＬＩＯＮ　ＳＯＵＬ　－　」に登場するキャラ「リオン・マードック」から許可をもらって引用させていただきました。ｒｉｈｉｔｏさんありがとうございます。ではお楽しみください。

１１／１３一夏を怒らせすぎとの指摘がありましたので感情をかなり抑えました。

EPISODE3

（何なんだよ…、このＰＳ（フェイズシフト）装甲とかＧＮ（ジーエヌ）ドライヴとか…。）
　一夏は困惑していた。教科書に載っている用語が理解できていなかった。
「あの―、織斑君？」
「はいっ！！！」
　一夏は思わず大きな声を出してしまった。
「あの…、もしかして、怒ってます？」
　怒ってるなんて滅相もない。
「いえ、ちょっと驚いただけです。すいません。」
「そうですか、良かったです。何か解らないところはありませんか？あれば言ってくださいね。私は先生ですから！」
　この際言ってしまおう。
「先生！」
「はい、織斑君！！」
「全部解りません！！！」

　ズガシャァァアア！！！

　何人かの女子がずっこけた。え？俺何か変な事言ったかな？
「織斑。入学前に事前学習書を読んだか？必読だぞ。」
　事前学習書？もしかして…。
「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました…。」
　バシッ！！
　千冬お得意の出席簿アタックが一夏の頭を狂い無く襲った。
「後で再発行してやる。一週間で覚えろ。いいな。」
「はい…。」
　千冬姉に睨まれたらどんなに気の強い奴でもたじろぐな…。

そんな一夏の考えが読まれていたのか、再び出席簿が一夏の頭を襲った。
二時間目が終わり、休憩時間に入った。
「ちょっとよろしくて？」
そう声をかけてきたのは外国人だった。若干薄い金髪は腰のあたりまで伸びている。制服はいかにもお嬢様らしいカスタムだった。ちなみにＧＳ学園は制服カスタム自由。
「ん？」
「まあっ！！私が話しかけているというのにそのようなお返事！！」
誰だっけ。俺この子知らない。ともかく伝えよう。言葉だ。
「悪いな、俺は君のこと知らないんだ。」
そう言ったらその女子はさらに驚いた。
「まぁ、この私を知らない！？セシリア・オルコット、イギリス代表候補生のこの私を！」
俺はセシリアが言った言葉の中に引っかかる節があった。
「一つ聞いて良いか？」
「いいですわよ。下々の声に答えるのも貴族の役目。」
何かいかにも上から目線。あんま好きじゃないんだよな…。
「……代表候補生って……何だ……？」
ドンガラガッシャーン！！！！！
クラス中の女子がずっこけた。……俺何か変な事でも言ったか？
「まぁ！！日本の方はここまで常識に疎いのでしょうか！」
こら待て。常識も何も俺はＧＳの事はここに来るまで何も知らなかったんだぞ。
「常識ですわよ、常識！！」
聞くだけ聞いてみるか。
「その代表候補生って？」
セシリアは腕を組んで説明を始めた。
「国家や企業の代表、その候補生、つまりエリートの事ですわ。単語から想像できるでしょう？」

なるほど。そう言うことか。
「そう、エリートなのですわ！私というエリートとクラスを同じにするだけでも奇跡！！幸運なのよ！！」
何か彼女の背景がバラになった気がしたが気のせいだろう。
「その事をもう少し自覚してくださる？」
「そうか。そりゃラッキーだな。」
あれ？セシリアが不機嫌そうな表情になった。
「馬鹿していますの…？」
「いいや。」
「男性で唯一ＧＳを起動させたと聞いて少しは期待していたのですが…、これでは…。」
俺に何かを期待されても困るんだがな…。

「まぁ、どうしてもＧＳの事が知りたいなら、泣いて頼めば教えてあげない事無いですわよ。下々の声に答えるのも貴族の勤め。それにエリートなのですから。唯一入試で教官を倒したエリート中のエリートですから。」
「入試って、ＧＳを動かすのだよな？」
セシリアは「それ以外に何があるのですの？」と答えてきた。
「俺も倒したぞ、教官。」
まぁ、向こうが突っ込んできて回避したら壁に激突してそのまま気絶しちゃったんだけどな。
「倒したのは……私だけと聞きましたが…。」
震える声でそう言ってきた。
「女子だけってオチじゃないのか？」
「あ、あ、あ、貴方も教官を倒したっていうの！！！！！！」
何か落ち着きが無い。とりあえず落ち着かせよう。うん、話はそれからだ。
「落ち着けよ、な？」
「こ、これが落ち着いて…。」

3時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。
「この続きはまた後で！逃げるんじゃありませんよ！」
誰が逃げるか。
「ではこれより、再来週行われるクラス代表対抗戦に出場するクラス代表を決める。ここで決定した者は今後生徒会会議への出席…、まぁクラス長と考えた方がわかりやすい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」
こういうお堅い役目は他の人に任せればいいな。さっきのセシリアって子に任せればいいかもな。こういうの引き受けてくれそうだしな。
「はい、織斑君を推薦します。」
なるほど、俺か。……。
「って俺ぇ！？」
「私も！！」
「私は…篠ノ之さんかな？」
俺の名前に混じって箒の名前が挙がった。
「え？何でなの？」
「知らないの？篠ノ之。ほら自ずと出てくるでしょ、天才のあの人が。」
その女子はなるほど！と手で相づちを打つ。あの人とは篠ノ之束。箒の姉さんにして、ＧＳを開発した天才だ。そういえば今はどうしているんだろう。
「他にはおらんか？いないならこの二人で来週の実習時間に決定戦を…。「お待ちください！」」
千冬がそう問いかける。そこへ割り込んだ一声。その声の主は。
「納得がいきませんわ！こういう役目は私こそ適任ですのに！！」
セシリアだった。エリートである自分が推薦されなかった事に腹を立てている。

「第一、こんな文化が後進的な島国に来てるだけでも耐え難いのにこの様な屈辱を一年間も味わえと！！」
「島国って、イギリスも同じだろ。」
「日本と同じにして貰いたくありませんわ！」
ったく、頭が固い奴だ。もう少し柔軟な思考を持とうぜ。
「こっちも言わせて貰うけどよ、イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ…。」
「何ですって！！イギリスにだって美味しい料理はありますわよ！！」
まずい、怒らせた。ここは引き下がって事を片付けよう。
「ごめん、こっちが悪かった。クラス代表は譲るよ！」
それを聞いて少し落ち着きを取り戻したセシリア。
「まぁ、たとえ勝負をしても私の勝ちは見えていますわ。唯一男性でＧＳを起動させた織斑さんならまだしも――」
「―所詮姉の七光りで入学した篠ノ之さんに私が負けるはず…。」
「おい、それは言い過ぎじゃないのか。」
「はい？」
「まぁ、確かに箒の姉さんは束さんだ。だけど、七光りだからと一概には出来ないだろ」
「セシリア・オルコット、お前を来週の決定戦で倒して反省させてやる。」
「何を急に…！先程譲るとおっしゃったのは貴方で…！」
「そこまでにしろ。オルコット、お前の先程の発言は良くない。織斑の方が正しい。この決着は来週のＧＳ実習の決定戦で行って貰う。では山田先生、授業を。」
箒は一人考えていた。
（一夏が……。）

EPISODE3（後書き）

どうでしたか？戦闘は話の進行具合からしたら一～二話くらい先です。

EPISODE4（前書き）

EPISODE4です。

EPISODE4

ようやく一日目が終わり、俺は帰ろうとした。
『生徒の呼び出しをする。一年生織斑。大至急学生寮事務室まで来るように。』
千冬姉に呼ばれた。学生寮事務室？何故だろう。俺は学生寮に向かった。
「織斑先生、お話って…？」
「お前の生活のことだ。事情があってな、今日から寮で生活することになった。」
「え？俺って自宅通学だったんじゃ…。」
「モルモットになりたいのか？」
「いいえ…。」
その一言で俺は沈黙した。まぁ、妥当な理由だけど…　。
「もう部屋は決まっている。１０３４号室だ。間違えるなよ。」
「はい。」
１０３４号室前に着いた。ここが俺の部屋か…。
一夏は扉を開いた。まず目に飛び込んできたのはベッドだ。見ただけでもフカフカ感が伝わってくる。そこらのホテルよりよっぽど質が良い。流石国立。
「すげぇ…。」
「誰かいるのか？」
「！！！！」
女子の声。それはシャワールームから聞こえてきた。慌てる一夏。
「あぁ、同室になった者か。これから一年間よろしく頼む。」
声が徐々に聞こえやすくなってくる。近づいている証拠だ。
「こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。」
（やばい…、あれ？でもこの声どこかで…。）
「私は篠ノ之箒――――」

シャワールームから出てきたのは6年ぶりに再会した幼なじみだった。その姿はタオル
一枚という異性に見られたらとてもじゃ済まないくらい恥ずかしい姿だった。
「ほ、箒…／／／／／／／／」
「い、一夏…／／／／／／／／／／」
綺麗できめ細かな肌をまだ乾ききってない水滴が滴る。それは一夏からはとても妖艶に
見えた。
「み、見るなぁ！！！！！！」
「ご、ごめん！！」
慌てて背を向ける一夏。その顔は真っ赤だ。
「な、何故お前がここにいる…？」
「な、何故って、俺の部屋だから…。それよりも着替えてくれ…、目のやり場に困る…。」
「わ、解った。」
慌てて箒は着替えを始めた。
「にしても、まさかお前と同室になるとはな…。」
「あぁ、俺も驚いたぜ。」
二人はベッドに腰掛けて話していた。箒は制服ではなく道着に着替えていた。箒だからなのか、とても似合う。
「お、お、お…。」
箒がもじもじしている。どうしたんだろう？
「お前から希望したのか、私の部屋にしろと…／／。」
「そうできたならそう言ってたさ。」
「？」
箒はきょとんとしていた。そうできたなら、そうしていたって…、もう私と同室って決まっているではないか…。
「ほら、俺の入学って、かなり特殊じゃん。だからさ、千冬姉が緊急で用意したらしいんだ。」

「そうか…。」
「でも、俺は箒と同じ部屋になれて嬉しいぜ。」
その言葉を聞いた箒は表情が明るくなった。
「そうか、それは何よりだ！ではこれから一年間よろしく頼む！」
「おう！」
俺と箒は握手を交わした。
翌日、朝のＳＨＲにて…。
「織斑、ＧＳの事だが…、訓練機が用意できない。学園の方で専用機を用意することになった。」
その言葉にクラス中がざわついた。
「この時期に専用機…？」
「それって政府からの支援が出るって事よね…？」
「いいなぁ―、私も専用機欲しいな…。」
専用機ってそんなに凄いのか…。
「届き次第受け渡し及び適合化（フッティング）を行う。忘れるなよ。」
そして受渡日…。まさか決定戦当日とは…。
「織斑。これが、お前の専用機ＧＮ－００１、エクシアだ。」
目の前には待機展開された専用機、「エクシア」が時を待っていた。この時を。
「背中を預けるように、そうだ。」
一夏の体にエクシアの装甲が装着されていく。一夏からしたらその感覚は一体化、と言える。
「よし、発進時間だ。準備は良いな。」
「はい。」
千冬の言葉に一夏はきちんと返事をする。
「一夏。」
箒が声をかけてきた。
「勝てよ、必ず、信じている。」
その言葉に勇気づけられた俺は指で「ありがとう」のサインを送る。

「発進タイミングを織斑君に譲渡します。」
山田先生がそう言ってきた。
「織斑一夏、エクシア発進します！！」
カタパルトから発進したエクシア。その背中からは設置されているGNドライヴで発生したGN粒子が美しくに尾を引いていた。
アリーナバトルフィールドにはすでにセシリアが専用機「ケルディム」を装着して待機していた。
「逃げなかったのですわね。」
「そっちこそ。」
「先日は申し訳ありませんでした…。素直に失言を認めますわ。」
その言葉は一夏にとって意外だった。まさか謝ってくるなんて。
「解ってくれればいいさ。でも―。」
「それと勝負は別ですわ！」
ケルディムの主力武器「GNスナイパーライフルII」がエクシアの胸部を直撃した。
「ぐぁぁっ！」
それを受けて吹っ飛ぶが体勢を立て直し、右腕のGNソードのライフルモードでケルディムを撃つ。しかし、簡単に避けられる。
「さぁ、ワルツの始まりですわ！！」
ケルディムの背部から何かが射出された。それはそれぞれ自動で動き、エクシアに向かってビームを発射する。
「これがこのケルディム最大の特徴、GNシールドビットによる全方向攻撃ですわ！」
くそっ！厄介だ、こいつは格闘型！接近できなければ意味が無い！ん？何故だ。あいつ、ライフルを発射してこない。もしかして…。試してみるか。
「はっ！」

エクシアは下半身背部に取り付けられたＧＮダガーを抜き取り、それをビットに投げつけた。それは見事に命中し、爆発した。
「何ですって！？当てた…。」
「ようやく解ったぜ。ビットは自己行動ではなく、お前が指示を出している。そして俺の反応が一番遅い角度から攻撃してくる。俺はさっき意識して反応の遅い角度を作った。そこへ攻撃をすれば破壊できる。」
セシリアにとって図星だった。まさか読まれてるなんて。
あっけなく射出されたビットは破壊された。しかし…。
「ビットは１１機ありましてよ！」
そう、搭載されているビットは１１機。射出していたのは９機。
一夏は不意を突かれ、ビームを受けてしまった。
「一夏！！」
煙が発生し、安全が確認できない。司令室で千冬が呟く。
「機体の能力に救われたな、馬鹿者。」
煙が晴れたそこには赤く輝くエクシアがいた。

――――トランザムシステム発動――――

そうエクシアのモニターに表示された。トランザムシステム。一部のＧＮドライヴだけに搭載されているシステム。高濃度圧縮ＧＮ粒子を全面開放し、機体のスペックを３倍相当まで上昇することが可能――。以上教科書から引用。
「はぁっ！！」
残りのビットを破壊し、ＧＮビームサーベルを抜き、一気にケルディムに接近する。
「くっ……！」
ビームの刃がケルディムを斬りつける直前、ビームの刃が展開を停止した。
機体の赤い輝きも沈黙し、動きが止まった。

――シールドエネルギーゼロ。戦闘続行不可能――

――

『勝者、セシリア・オルコット。』

「……。」

――負けた。俺は。

「全く、よくここまで持ち上げてくれたな馬鹿者。」

全く嬉しくない褒め言葉を千冬姉がくれた。

「にしても、何で負けたんだ？」

「トランザムシステムは、高濃度圧縮ＧＮ粒子と並行してシールドエネルギーも消費する。それでシールドエネルギーが空になった。」

「なるほど…。」

「まぁ、今回は自動発動だったが訓練すれば自在に発動できるようになる。お前ならな。」

「お前なら？なぜそう言い切れるんだ？」

千冬はフッ、と微笑み口を開いた。

「私の弟だからな。」

その言葉は下校している今も耳に残った。

「一夏、惜しかったな。」

「あぁ、すまないな、お前に特訓してもらったのに…。」

「いや、相手は代表候補生、あそこまで戦えただけ良い方だ。」

「箒！」

「な、何だ？」

箒は突然大きめの声で名前を呼ばれて少し驚いた。

「これからも特訓に付き合ってくれ。」

「そうか、そうか。仕方ないな、よし、これからは共に特訓をしよう！！」

「ありがたい！」

シャァァァァァアアア……。

シャワールームにはシャワーが流れる音が響く。そこには先程一夏と戦ったセシリア・オルコットが立っていた。

無駄の無く引き締まった体型。胸はそこまで大きくないが（日本人と比べたら大きい）その大きさが体の見た目のバランスを整えているので本人としては複雑な心境だ。

（織斑……一夏……。）

（あの瞳は……。）

彼女の母親は今の女尊男卑の社会になる前からいくつもの企業を経営する人だった。

母は自分に対して厳しかった。それでも母を尊敬し続けた。いつか自分もあのような女性になりたいと。

一方父親は名家に婿入りしたせいか、いつもオドオドして母の機嫌を伺っていた。その時からセシリアは決めていた。―将来あのようなひ弱な男とは結婚しないと。

ＧＳが発表されてから父の態度はますますひどくなった。

そして、両親は事故死した。一説は謀殺説がささやかれたが、事故現場がそれを否定した。ホテルが崩れ、２００人近い死者が出た。あの日、二人は何故一緒にいたのか。

それからオルコット家の莫大な遺産を狙う輩が現れ始めた。遺産を守るべく、必死で勉強した。

そしてＧＳ適正が高い事が発覚。国からは遺産を守るための様々な好条件が出された。

そして、稼働データの為に日本のＧＳ学園にやって来た。

そして出会ってしまった。自分の理想の瞳を持った男と。迷いもなく、曇りもない。実直な瞳を持った男と。

（織斑…一夏…）

その名前を浮かべるだけで胸が熱くなる。

「もっと知りたい、彼のことを。もっと近づきたい、彼に。」

その声はシャワーの音で消えていった。

EPISODE4（後書き）

ガンダムの戦闘シーンって難しいですね。さて次回は中華少女が登場します。お楽しみに。今回からアニメっぽい次回予告を入れます。

【次回予告】

「ねぇねぇ誰あの子？」

「代表候補生にして織斑君の幼なじみ！？」

「彼を取り巻く女性って多いね…。」

「次回もお楽しみに！！」

EPISODE5（前書き）

ＥＰＩＳＯＤＥ５です。ついにあの子が登場します。主はファース党なのであつかいはあまり…。他の党の方すいません。一筋なので。

EPISODE5

「ここがGS学園…。」
その少女は夕暮れの中、ツインテールをなびかせていた。
「それでは一組クラス代表は織斑一夏君に決定です。」
織斑一夏って奴がもう一人このクラスに在籍してるのか。うんうん…って、そんな訳あるか！！！
「あれ、でも俺負けたし…。」
「それは、私が辞退したからですわ。」
そう言いながらセシリアが立ち上がった。
「貴族といえど失言は御法度。責任は取りますわ。それで、今回は一夏さんに代表の座をお譲りして責任を取りましたの。エレガントでパーフェクトなこの私が指導すれば一夏さんの実力は…。」
「ちょっと待て。」
セシリアに割って入ったのは箒だった。
「一夏の特訓は私が見ることになっている。本人から直接頼まれたからな。」
「あら、GSランクがCの篠ノ之さん。貴方の実力では一夏さんの成長は…。」
「お前のような撃ってばかりのいやらしい戦い方こそ意味がない。一夏のエクシアは近接格闘型だぞ。」
二人が言い争っている。そこへ…。
「そこまでにしろ。貴様等のランクなど産まれたばかりのヒヨコも同然。織斑はもう教えて貰う相手が決まっている。割り込みはよせ。」
千冬がさらに割って入った。――千冬姉の言った事って妙に効果があるんだよな。セシリアも鎮火してるし。
一時間目が終わり、休憩時間になった。
「知ってる織斑君？二組のクラス代表が交代になったんだって。」

「え？本当に？」
どうやら二組のクラス代表が交代したらしい。
「あれれ、おりむ～興味あるの～？しのっち一筋なのに～？」
そんなのんきな口調で話しかけてきたのはのほほんさんこと布仏（のほとけ）本音（ほんね）。だぼだぼ系の服を着用している癒し系。
「な！何故そうなる！！」
「え～だってさ、しのっちの為にあそこまで言うんだよ～。そう考えちゃうよ～。ふぁ～眠い…。ぐぅ…。」
寝ちゃってるよ。立ったまま。本音の発言に俺と箒は顔を赤らめる。ちなみにおりむ～とは俺、しのっちとは箒の事だ。
「話しを元に戻すけど、強いのかな？」
「専用機を持ってるのは一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「その情報古いよ。」

教室に響く声。その声が聞こえた方向を向くとそこには一人の女子が立っていた。
「お前、…鈴か？」
「そうよ！中国代表候補生、鳳鈴音（ファンリンイン）！今日は宣戦布告に来たって訳！」
鳳鈴音と名乗った少女。小柄な体躯で茶髪をサイドアップテールで纏めている。
「あれが二組クラス代表…。」
「中国代表候補生…。」
（なんなのだ…。一夏と親しそうに…。）
箒は一人そう考えていた。手に握ったシャーペンはいつの間にか粉々に砕け散っていた。
「鈴！何格好つけてんだ？全然似合わないぞ！」
その言葉に鈴の顔が赤くなる。

「な、何て事いうのよあんたはぁ！！」
お、俺の知ってる喋り方に戻った。それでこそ鈴だ。
「どけ。邪魔だ。」
「だ、誰…。」
鈴の表情が凍り付いた。この反応って事は我らがクラス担任の千冬姉が降臨なされた。
「ち、千冬さん…。」
「学校では織斑先生だ。代表候補生になって礼儀を忘れたか。さっさとクラスに戻れ。」
「はい…。」
鈴はとぼとぼ歩いて教室を出ていった。
放課後、俺と箒は第一アリーナに向かった。
「ったく、一夏、遅いわよ。女の子を待たせるのが男にとってどれだけ重たい罪か…。」
鈴が立っていた。やばい、鈴が怒りの兆しを見せている。穏便に事を…。
「おいおい、待てよ。待っててくれって俺か鈴が言ったんならまだしも…。」
「ま、いいけど。」
ホッ、助かった。何だろう、後ろから毘沙門天の気配を感じる。え？何で毘沙門天か解るかって？そりゃ、振り向いたらそこには竹刀を構えて怒りが露わになった箒さんが立っておられるからじゃないですか。
「一夏…私がいるというのに他の女と約束か…。楽しそうだな…。覚悟ぉぉぉぉぉ！！」
この際毘沙門天とか関係ない！！逃げろぉぉぉぉぉっっっっっ！！
「自業自得ね…。馬鹿…。」
鈴は呆れていた。―何か面倒くさくなったからアリーナ、出ていこ…。
その後一夏はアリーナを百周して箒の竹刀の餌食になった。

「は――っ、は――っ、は――っ、は――っ……。自分でも百周走れたことに驚きを隠せない…。」

アリーナ更衣室で荒く呼吸をする一夏がいた。

「大変だったわね一夏。これ飲んで元気出しなさい。」

鈴が一夏を心配してやって来た。手に持っていたボトルのスポーツドリンクを投げ渡した。

「お、ちょうどいいぬるさだな。この方が体に吸収されやすい。」

「昔からそうよね。体の健康に気を使ってさ。」

「心配しておかないと老後に痛い目を見るのはお前とその家族だぞ。」

「一夏は心配してくれる?老後のあたし…。」

鈴は頬が赤く染まっていた。

「ん?何か言ったか?」

「な、何も言ってないわよ馬鹿!!!!!」

そんなに怒らなくても良いだろ。まぁ、鈴は昔からこうだったけど…。

「それじゃあ俺は部屋に戻るよ。箒もシャワーを使い終わってる頃だし。」

鈴はきょとんとした。部屋に戻る?それはいい。箒がシャワーを使い終わってる頃?

「あ、あんた、あの子とどういう関係なの!?」

ん?どうしたんだ?鈴の奴、突然…。

「関係って、あ。まだ言ってなかったな。俺はあいつと同室なんだよ。」

「えええええええええええええ!!!!!!!!!」

鈴、五月蠅いぞ。そんなに大きい声を出すな。お前はスピーカーか?

「でも助かったなぁ。見ず知らずの女の子よりも幼なじみだから気が楽だしさ。」

「お、お、」

鈴が何か呟き始めた。お？お腹すいたのか？それともお腹痛いのか？うーむ…。

「幼なじみなら良いのねっ！！」

EPISODE5（後書き）

疲れました。連日投稿はきついです。励ましの言葉が何よりの栄養剤です

【次回予告】

「部屋変われって…。」

「行動力あるよね…。」

「次回では織斑君の過去が！！」

「え？もしかして織斑君の知られざる秘密が明らかになるとか！？」

「次回もお楽しみに！！」

EPISODE6（前書き）

こちらが本当のＥＰＩＳＯＤＥ６です。すいませんでした。

EPISODE6

「お願い、部屋変わって♪」
「馬鹿な事を言うな！！」
鈴が部屋にやって来た。その理由は部屋を変われ、だ。いきなりすぎる。
「いやぁー篠ノ之さんも男と一緒じゃ気まずいでしょ。あたしが変わってあげる。」
「別に私は気まずくなど…（あってると言えばあってるんだが…）」
箒は俺に抗議の眼差しを送ってきた。俺に振るなよ…。
「さ、一夏。手続きに行くわよ。」
「あ、おい！」
鈴が俺の手を引っ張り、寮の事務室へ向かおうとした。
「こらぁ！！」
「馬鹿！！箒！」
箒は置いてあった竹刀を鈴に振り下ろそうとした。しかし…。
「！！」
「部分…展開…。」
鈴は中国代表候補生。つまり専用機持ち。部分展開はお手の物だ。
「今の、生身の人間なら本気であぶないわよ！」
「あ…。」
箒は持っていた竹刀を落とした。床に当たる音が響く。
「まったく…」
鈴は部分展開した右腕を動かした。
ザシュッ！！
「一夏…？」
動かしたＧＳの装甲が一夏の腕を切っていた。一夏の腕からは大量とまでは行かないがそれなり

の量が出血していた。
「あ……血……。」
「うわぁぁあああああ！！！」
一夏が血を見て叫び始めた。

「とりあえず先生に事情を説明してくるわ。」
二人で一夏の応急処置をした後に鈴はそう言い残して部屋を後にした。
しばらくして千冬が部屋にやって来て一夏は寮の医務室へ運ばれた。箒は千冬から部屋で聞いた。一夏が何故あそこまで血に怯えたのかを…。
四年前、箒が転校してから三ヶ月が経過した頃。一夏は鈴といつも通り下校していた。
「ふーん、一夏って剣道やってたんだ。いままで知らなかったわ。」
「あぁ、千冬姉がやってみろっていわれてさ。それからなんだ。」
そんな何気ない会話が続いていた。
ドンッ！
「痛たっ！」
鈴が誰かとぶつかってしまった。普通の人にぶつかったなら話しをしてあやまれば済んだ。しかし…。
「おい痛いなぁ。骨が折れてしまったぜ。治療費、払って貰おうか。」
いるいるこういう奴。ほんといつの世の中にも最低な奴はいるんだな。
「払える訳ないでしょう馬鹿！！」
鈴は気が強く、こんな感じの相手にも反論する性格だった。
「払えないなら、体で払って貰おうかぁ！！」
ぶつかった男は鈴の頬を平手打ちにした。それで気絶する鈴。
「鈴！！」
一夏は無我夢中で男に立ち向かった。男はポケットに入れていた

ナイフを振った。
ザシュッ！！
ナイフは一夏の腕を切った。傷口からは大量の血が溢れ出た。
「うぐっ！！うわぁぁぁぁぁぁあああ！！」
痛みで思い切り叫ぶ一夏。その声を聞いて近くの交番の警察官が駆けつけた。
「君！！大丈夫か？名前は？」
「お……織斑、一夏…。連絡先は…バッグの中の手帳に…。」
一夏は気絶した。駆けつけた警官は一夏と鈴を交番まで運んだ。
それから一時間後、一夏は目を覚ました。病院のベッドに一夏は寝ていた。
「気がついたか。」
横には千冬姉が座っていた。
「千冬姉…、鈴は？」
「鈴音は無事だ。怪我もなく今は自宅だ。」
「よかった…。」
一夏は安心したのか、再び眠り始めた。
「すいません、織斑一夏君の、保護者の方ですか？」
後ろから一夏の治療を行った医師がやって来た。
「はい、姉です。」
「なら都合がいい。実は…」

「本当ですか！？」
「はい。一夏君は恐らく今は多量の血を見るとひどく怯えてしまい、精神不安定になってしまいます。恐らく切られた時の血を見て…。」
「そうでしたか…。」
千冬は決めた。今後一夏には血を一切見せないと。
「――という訳だ。その時鈴音は気絶していたから何も知らない。そこは理解してくれ。」
千冬の話を聞いた箒は驚きを隠せなかった。まさか自分が転校し

た後にそんな事があったなんて。
「篠ノ之。あいつを頼む。私以外であいつを一番理解しているのはお前だけだ。」
「わかりました。任せてください。」
千冬は安心した。一夏を理解してくれる人がいてくれて。
部屋で箒は緑茶を一人飲んでいた。
「ただいま箒。」
一夏が帰って来た。腕には包帯を巻いている。
「怪我の方は大丈夫か？」
「あぁ、細胞再生活性化治療、とかいうやつを受けたから安心だ。対抗戦には差し支えない。」
それを聞いて箒は安心した。
「その、千冬さんから聞いた。お前は昔…。」
「聞いたのか…。くっ…！」
一夏が少し怯えた。思い出したのか、体が若干震えている。
「一夏…。」
「箒／／／！？」
箒は一夏をそっと抱き寄せた。いくら唐変木の一夏と言えど女子に抱き寄せられたら赤くなる。
「お前は、もう怖がらなくてもいい。怖ければ私が側にいてやる。だから安心しろ。」
「箒……、うっ……。」
一夏の目が光った。
「泣いているのか…？」
「な訳ないだろ…。男が女の前で泣いてたまるかよ…。」
「泣いても良いぞ。」
「へ？」
その時の箒の表情はとても慈悲に溢れていた。
「男でも、泣いてしまうことはある。今回はたまたまそれが私の前だった。それだけではないか。」

「あ…、俺…。」
「私の元で良ければ、泣いても良いぞ。」
一夏は箒の優しさを体中で感じ、自分の我慢していた事を全て吐き出す様に泣き出した。

EPISODE6（後書き）

一夏が怯える表現は沙月さん作ＩＳ　ｉｆ　～　鈴　ｉｎ　～より許可を頂いて拝借いたしました。沙月さん、ありがとうございます。

【次回予告】

「鳳さんの専用機、格好いい～！！」

「織斑君勝てるかな…？」

「大丈夫！！きっと勝てるよ！！」

「けどその勝負に乱入する輩が！！」

「次回もお楽しみに！！」

EPISODE7（前書き）

対抗戦始まります。

EPISODE7

ＧＳ学園第一アリーナ。ここで本日、一年生によるクラス代表対抗戦が行われる。

「一夏さん、私が教えた無反動回転（アブソリュートターン）、活用してくださいね。格闘戦仕様とはいえ、射撃武器もあるのですし…」

そう言ったのはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。

「私の教えた剣での立ち回りも忘れるなよ」

そう言ったのは篠ノ之箒。俺の小学校時代の幼なじみ。こいつに対して最近何か言い表せない何かが…。

「織斑君、発信準備、良いですか？」

「あ、はい。いつでも良いですよ」

そう言ったのは山田真耶。俺の副担任の先生。ちなみに担任は…。

「織斑、お前に発進タイミングを譲渡する。いつでも良いぞ」

千冬姉こと織斑千冬。絵に描いたような…ここまでにしておこう。

「織斑一夏、エクシア、発進する！！」

カタパルトからエクシアはＧＮ粒子を靡かせながら発進していった。

観客席から発進する一人の少年。見た目は日系であり、恐らく日本人だろう。

「あいつが一人目の男性装着者、織斑一夏…」

その少年の左腕には白い時計が付けられていた。

「逃げなかったのね」

そう言ったのは凰鈴音。中国代表候補生にして一夏の主に中学校時代の幼なじみ。

「あたりまえだ」

「あのさ、こないだのあれ、ごめんね。昔の嫌な記憶、思い出させちゃって…」

こないだのあれとは、寮での出来事。あれはきつかったが…箒がいてくれたから落ち着けた。無論、鈴も先生に報告してくれたからあいつにもその点は感謝。
「いいぜ、別に気にしてないし」
「うん、本当にごめんね。でも…」

「それと勝負は別よ！」

試合開始のアラームと共に鈴は専用機である「アルトロン」のツインビームトライデントを用いてこちらへ攻撃を仕掛けてきた。それを一夏はＧＮソードで受け止める。
「くっ…押されてる…！！」
「まだまだぁ！」
ズドン！！
格闘武器同士でのつばりあいなのに脇腹に何かが直撃、エクシアは吹き飛ばされて地上へと落下した。
「くそ…、まさかフレキシブルビームキャノンがあるなんて…やられた…」
「初見にしてはやるじゃない」
一夏は痛む体を必死に起こした。
（こうなったら…ＴＲＡＮＳ－ＡＭで終わらせる！！）
「ＴＲＡＮＳ－ＡＭ！」
エクシアの全身が紅く輝きだした。ＴＲＡＮＳ－ＡＭ　ＳＹＳＴＥＭが発動したからだ。猛スピードで鈴へ迫るエクシア。
「！？嘘…速い！！」
ＧＮソードがアルトロンを一太刀にしようとしたその時――。
シュンッ！！
目の前をビームが通過した。ビームが飛来した方向を見ると――。
「何よあれ…」
一機のＧＳがいた。

「まずいわ、乱入者よ！」
「先生！！」
「山田先生、アリーナ全体にＬｖ４警報を！！」
「了解しました！」
『Ｌｖ４警報発令！Ｌｖ４警報発令！生徒は教員の指示に従って速やかに避難せよ！繰り返す…』
「織斑先生、乱入ＧＳのデータです！」
千冬はモニターのデータを見つめる。
「製造元不明、無人ＧＳ……」
「ハルファス…」

アリーナではエクシアとアルトロンが協力してハルファスを迎撃していた。
「畜生、こいつ、強い！！」
フェザーファンネルが二人を苦しめていた。
「あぁもう、鬱陶しいったらありゃしないわ！！」
代表候補生でも手こずるハルファス。黒い不死鳥の姿を持つＧＳ。
「俺のエクシアのシールドエネルギーも残りがわずかだ…」
「弱気になるんじゃないわよ！！何か、解決方法があるはずよ！！」
「いや、代表候補生であるお前だからこそ、打つ手がないことが解ってるんじゃないのか？」
鈴は考えを読まれて面食らっていた。――そうよ、確かに一夏の言う通りじゃない。でも…。
「篠ノ之さん？どこへ行ったのでしょうか…？」
セシリアは先ほどまで側にいた箒を探していた。彼女の脳裏に何かが浮かんできた。

（篠ノ之さん、まさか…！！！）
その場への待機命令を千冬から言い渡されたセシリアはただ無事を祈るほかなかった。

「一夏ぁ！！！！！」
アリーナにその声は轟いた。箒が拡声器を最大出力にして叫んでいた。
「箒！？」
「男なら、男なら、そのくらいの敵など倒してみせろ！！！」
その声を聞いてハルファスはフェザーファンネルを箒を攻撃するように指示を出した。ビームが箒に迫る。
「まずい、箒、逃げろ！！」
「っ！！！！！！」
――間に合わない！！くそっ、エクシア、少しだけで良い！！ＴＲＡＮＳ－ＡＭを起動させてれ！！！！！！
その願いが通じたのか、エクシアは再度ＴＲＡＮＳ－ＡＭを起動させた。
「はぁぁっ！！」
ＧＮダガー、ＧＮライフルでフェザーファンネルを全て撃ち落とし、箒の安全を確保した。
「貴様、箒を…」

「箒を攻撃したなぁぁぁ！！！」

その時、一夏の瞳が変わった。怒りに満ちた、そして進化した瞳。
「箒を攻撃した罪は…罪は重いぞぉぉ！！」
ＧＮビームサーベルでハルファスの両腕を切り落とした。ＴＲＡＮＳ－ＡＭはＧＮドライヴによって性質が違う。少なくとも言えることはエクシアのＴＲＡＮＳ－ＡＭは――。
絶対防御、それら全てを通過して本体に直接ダメージを与える。

それにより、ハルファスの両腕は切り落とされた。
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
ＧＮソードでハルファスを真っ二つに切り落とし、戦いは終了した。

「はぁ…疲れた…」
そう呟きながら一夏は寮の自室の扉を開けた。
「ん…？何か、良いにおいがする…おぉっ！！」
「遅いぞ一夏。その…すまなかったな…。アリーナでは…」
良いにおいの正体、それは箒が作った焼魚だった。ちなみに焼いた魚は秋刀魚（さんま）。旬ではないが美味しそうな仕上がりだ。
「アリーナの事は別に良いよ。これ、俺の為に作ってくれたのか？」
「あぁ、その、なんだ、たまにはこういう食事を二人で摂りたくてな…」
そういえば俺のとは別にもう一人前同じ物が用意されている。なるほど。
「それじゃ、いただきます」
一夏は早速秋刀魚に手を付けた。
「おぉっ、美味い！！この味付け俺の好みなんだよなぁ！」
「む、昔私の家で母さんが作った物をよく食べていただろ。その味を再現してみた。き、気に入ってくれたなら嬉しい」
久々に見たな、箒の笑顔。
その語も俺達は食事は昔の話しをネタにして楽しい食事となった。

翌日。教室が騒がしい。何故？そりゃ…。
「今日は、転入生を紹介します。まずはフランスからやってきたシャルル・デュノア君です」
新しい嵐は目前に迫っていた。
場所は変わって一年四組。こちらでも同じような事態が…。
「えー、転入生の白枝一馬（しらえだかずま）君だ。彼は日本代表候補生、教わること

も多いだろう」
「白枝一馬です。これからよろしくお願いします」
このクラスは一組の様な拍手喝采は起こらなかった。その中で一馬を見つめる少女がいた。
（……）
その少女の名前は更識簪（さらしきかんざし）。一馬と同じ日本代表候補生。
ＧＳ学園にやって来た二人の男子。それは何を意味するのか―。

EPISODE7（後書き）

オリキャラ「白枝一馬」を登場させました。専用機は…名前からして、解りますよね…？

【次回予告】

「男の装着者が二人も！？」

「何か凄い事が起こりそうだね…」

「次回はGSから離れてちょっとした日常！」

「次回もお楽しみに！」

EPISODE8（前書き）

今回は日常を描きます。内容は短いです。シャルの日常はまた別の機会に描きます。

EPISODE8

【一夏・箒】
「ん…もう…朝か…でも…日曜だし、もう五分…」
一夏はベッドで寝ていた。朝によくある「あともう五分…」の状態だ。
ふにゅ。
(何だ…？柔らかくて気持ちいい…何かは…まぁいいや…)
ふにゅふにゅ。
体で受け止める感触はとても心地良い。
「ん……」
ちょっと待て。ものすごい近くから俺の物ではない声が聞こえたぞ。
恐る恐る箒のベッドの方を振り向く一夏。目に入った光景は一夏の眠気を一気に吹き飛ばした。
ベッドはもぬけのから。つまり…。
「うわぁっ！！！」
ベッドの中の心地よい物の正体は箒だった。
(ね、寝顔が、超可愛い…／／／／)
普段の箒からは見ることの出来ない可愛さだった。
「う、五月蠅いぞ……」
や・ば・い。
一夏は全力で部屋から脱出しようとしたが…。
朝の食堂にて片足を引きずる一夏が目撃されたらしい。
【一馬・簪】
「～～～～～～～～～～～～～～♪」
先日転入してきた日本代表候補生の白枝一馬。彼は寮の廊下を歩きながら鼻歌を歌っていた。
「ん？聞き覚えのある声が…」

一馬はその声が聞こえる方へ歩いた。
「お！やっぱり！」
寮のＴＶにて放送していたアニメの声だった。タイトルはちなみに…。
「トラベル・ユニバース…」
「トラベル・ユニバース」。それは近未来に主人公の少年が太陽系からさらに遠い銀河系を巡るＳＦアニメだ。それを見ていた少女がいた。
「…貴方は…」
更識簪だった。一馬と同じ一年四組に在籍している同じ日本代表候補生だ。
「えっと…更識…さんだっけ？」
「うん……」
簪はゆっくりとうなずいた。
「更識さんってこのアニメ、好きなの？」
「えぇ…だって……面白い…もしかして…変？」
簪は若干困った顔で質問してきた。
「いや、別に。女の子でも好きになるだろ、アニメ。馬鹿にはしないよ」
「……ありがと…／／」
簪の表情は少し熱ぽかった。
「一緒に、見ようぜ！」
「……うん……」
【セシリア・鈴】
「……足りませんわね…」
そう言ってセシリアはとある物を大量に鍋へ入れた。彼女が作っているのはカレーライスらしい。
（この料理で、一夏さんのハートをゲットですわ！）
「セシリアー、何作ってるの？」
「一夏さんに差し上げるカレーを作っていますの」

「ちょっと味見させてー」
「いいですわよ」
パクッ。……ドサッ。
「ちょ、ちょっと、鈴さん!?どうしたのかしら…」
セシリアがカレーを食べた。
パクッ。……ドサッ。
キッチンに置かれていたとある物。その名前は…。

「汚れはこれで十分!!汚れキラー!!」
本日の犠牲者
凰鈴音　セシリア・オルコット
両者ともに食あたり…。

EPISODE8（後書き）

どうでしたか？面白かったのであれば幸いです。

【次回予告】

「白枝君のＧＳかっこいいね～～～」

「デュノア君のＧＳもかっこいい～～～～」

「そこへやってくる新たな転校生！！」

「白枝君とデュノア君の秘密談義！？」

「次回もお楽しみに！！」

EPISODE9（前書き）

シャルと一馬が戦います。そしてまた転校生！？一人じゃなかったりして…。←は次回のお楽しみ。

EPISODE9

場所はＧＳ学園第２アリーナ。ここは主に実習授業や自己訓練で使われる。現在アリーナにはシャルルと一馬がいた。

「それじゃ、始めるぜ」

「うん、負けないよ！」

両者ともにＧＳを展開していた。

一馬専用ＧＳ「ユニコーン」。世界各国の代表候補生のＧＳを製造している大手ＧＳ企業「アナハイム・エレクトロニクス」社製。一発で通常のビームライフルの数倍の威力を持つビームマグナムが特徴だ。

シャルル専用ＧＳ「ヘビーアームズ改」。デュノア社製第二世代ＧＳ「ヘビーアームズ」の改修機。第二世代が主流の時期は高性能のＧＳだったが第三世代の開発が重要となってきた今日（こんにち）、ヘビーアームズ改までが限界のデュノア社は株価が下落しているだとか。火力は第三世代にも負けない。

「はぁっ！」

ユニコーンの右手に握られたビームマグナムからビームが発射された。一般的なビームライフルと比べて太さは変わりないが威力が高い。ビームライフルの着弾にも耐える超耐久合金製の壁をへこますほどだ。

「凄い威力だね！でも…当たらなければどうと言うことはないよ！」

シャルルはヘビーアームズ改の左腕部に装備されている大型ガトリングガンを発射した。とてつもない量の弾丸が一馬を――――。

「いやーシャルル強かったぜ。負けたよ」

「僕の方こそ、ビームマグナム、だっけ？あれの威力には驚いたよ。命中したらひとたまりもないね」

一馬には一つシャルルに対して疑問があった。
（こいつ、なんでいつも俺とか一夏とかとは着替えないんだ？）
そう、シャルルは一夏と一馬と一緒に着替えたことはない。
物難しそうにシャルルを見つめる一馬。
「ど、どうしたの？」
「いや、別に…」
「変な一馬…」
こんなシチュエーション、どこかで見たことがあるような無いような…。更識さんに聞いてみるか。
「じゃあシャルル、俺は先に帰るよ」
「あ、うん。また部屋でね」
一馬はそう言って走っていった。
一人となったシャルルは呟いた。
「良かった……まだ……」

学生寮１０３９号室。この部屋の主は…。
コンコン。
「誰…？」
そう言いながらドアを開けたのは簪だった。
「よっ。更識さん。入って、良い？」
「あ…駄目…ごめん…話なら…外で…」
のぞかれたくない物でもあるのだろうか。のぞきの趣味はないが。
ともかく俺と更識さんは部屋の外で話しを始めた。
「でさ、話ってのは――――」

話を終えて部屋へ戻る一馬。部屋のドアを開けたらシャワーの音が聞こえた。そう言えばボディーソープ切れてたっけ…。使ってるのはシャルルだろう。
「おーい、シャルル、ボディーソー――――」
「へっ――――」

シャワールーム。そこから出てきたのはシャルルにうり二つの女子だった。
「まさか…本当に…！」
「かっ、か…一馬…」
慌てて一馬は退室していった。
（更識さんの言っていたことが当たってた…！）

しばらくして、部屋から「いいよ」と声が聞こえてきた。扉を開けて中に入る。シャルル・デュノアのベッドに先程の女子がいた。てゆうか、シャルル・デュノア本人だ。ヘビーアームズ改の待機形態であるペンダントを着けている。
「で、なんで男装してここに来たんだ？」
「うん、これは、父からの命令なんだ」
「父、てもしかして、デュノア社社長の？いくら何でも自分のむす…じゃなくて娘にそんなこと…」
シャルルの口からは一馬にはにわかに信じられない言葉が出てきた。
「僕はね、『愛人』の子供なんだ」
「！！」
一馬にもその言葉は理解できた。しかし、現実に、こんなに身近な奴がそんな境遇とは思いもしなかった。
「僕がデュノアの本家に引き取られたのは、ちょうど二年前くらい。その際に、会社のこととかを知ったんだ。父からは母はもう死んだって聞かされたんだ」
「……」
シャルルの話を口を開かずに聞く一馬。それに安心したのか、シャルルは話を続けた。
「父の本妻に会ったときは驚いたよ。「この泥棒猫の娘が！」ってひっぱたかれたんだ。事前に知っていれば、こんな事にはならなか

ったんだけどね」
「なるほど、でもそれがどうやったら男装につながるんだ？」
「デュノア社の開発できるＧＳは最新でも一世代後ろのヘビーアームズ。僕は代表候補生ではあるけどこんな旧式の機体が専用機、ってくらい会社は追い込まれているんだ。そこへ、君たちのご登場」
君たちのご登場。一夏と一馬だ。
「幸いなのか、僕は顔立ちは中性的だから、男装してごまかせたんだ。僕の役目は、君たちのＧＳの戦闘データを盗むことと、広告塔の役目。そして、失敗したら証拠抹殺のため、死なされるかな」
「っ…！！」
一馬は腸が煮えくりかえる思いでいっぱいだった。
「エクシアとユニ「もういい」…へ？」
「いくら、いくら父親だからってあんまりだ！！確かに親がいなければ子供は生まれない！だからといって何をしても良いわけあるか！！」
シャルルは困惑しながらも一馬に話しかけた。
「怒ってるの…？僕のこと…」
「お前のことを怒る訳あるか！命を…大事にしないなんて…！くそぉ！！！」
「あのさ、一馬。命は確かに…だけど、どうしてそこまで…？」
シャルルの言葉に冷静になった一馬。
「言おうか？俺の過去を…」
「うん…」

「俺の母さんは、俺が一歳の頃に病気で死んだ。それからは、父さんが俺を育ててくれた。父さんは、アナハイム社のＧＳ開発責任者だったんだ」
「へぇ…」
「一夏の一見の少し後に、あっただろ。アナハイム社ＧＳ工場が何

者かに襲撃されたって」
「うん…」
アナハイム社襲撃事件。アナハイム社のＧＳ開発施設が何者かによって襲撃され、３０人近い死者を出した事件。
「そこで俺の父さんは―」
「俺が殺した」
「！！」
「いや、殺してしまった、の方があってるな。でも、あれはほとんど…」
「続けて」
シャルルは真剣な眼差しで一馬を見つめた。
「あぁ…。事件の日、俺は自分で作った昼食弁当を父さんに届けに行ったんだ」

【事件当日　アナハイム社日本支部ＧＳ開発工場】
「父さん、はいこれ弁当。しっかり食べて頑張ってよ」
「一馬、いつもすまんな」
「いいって。母さんなしで俺をここまで育ててくれたんだし」
一馬の父、白枝王喜（しらえだおうき）はふとひらめいた。
「一馬、お前に一つ見せてやろう」
「何を？」
「今我々が開発中のＧＳだ」
「え…でも俺が見ちゃ…」
王喜は「安心しろ。男にゃ動かせない」と言って一馬を案内した。
奥のコンテナにはそのＧＳはあった。
「アナハイム社製第三世代ＧＳ「ユニコーン」だ」
ユニコーンは純白のボディが綺麗だった。
「これは……『ヴーッ！ヴーッ！』…どうした！！」

「チーフ！謎の集団による襲撃です！」
「よし、ユニコーンを安全区画まで運べ！配備ＧＳを出撃させろ！！」
王喜は的確な指示で混乱する工場をひとまとめにした。
「さぁ一馬、お前も…」
どがぁぁあん！！
「はっ！！！」
一馬が避難しようとしたその時、爆発で瓦礫が王喜の体を直撃した。
「父さん！」
「一馬……けがは……ないか……？」
王喜の背中からは大量の血があふれ出ていた。
「父さん…！俺が、あのとき、断っていれば…！！」
「気に…するな…。それよりも、ここから…」
四方を瓦礫で囲まれ、脱出できない。
「無理だよ！」
「ひとつだけ……方法がある……。ユニコーンを……使え」
確かに、ユニコーンを使えば脱出できる。しかし、一馬は男。ＧＳは女にしか反応しない。
「起動しないよ！」
「焦るな…。あれはお前が使えるように、ひそかにプログラムしておいた。ユニコーンは、お前の言うことしか聞かない…」
一馬はその言葉を信じてユニコーンに手をかざした。すると、自動的に装甲が装着された。
「嘘だろ…」
「ふ…上出来だ」
「父さん、一緒に脱出しよう！」
王喜は嬉しそうで残念そうな表情で一馬を見つめた。
「私は…もう手遅れだ。お前だけでも……」

「父さん！！！」
「いけ、一馬！！！！」
その時、王喜の真上の天井がさらに崩れ、王喜の体をつぶした。
「と、父さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
一馬は悲しみに暮れた。ずっと自分を大切に思い、優しくしてくれた父の死。それは１５歳の身には重くのしかかった。
「く……！」
そこへ、襲撃者がＧＳ反応を関知してやって来た。
「嘘でしょ、男よ。二人目よ」
「私たちの捕虜にする？」
襲撃者達はユニコーンごと一馬を拉致しようとしたが…。
「はぁっ！！」
一馬はユニコーンの主力武器「ビームマグナム」を襲撃者に向けて発射した。
「がっ！？」
襲撃者のＧＳ「ＧＮ－Ｘ」は第二世代の量産型。しかしユニコーンは第三世代。世代の差という物なのか。一撃で展開を解除させた。
「くそっ、やっておしまい！」
リーダー格の女が指示を出した。全ＧＳが一斉に射撃を開始した。
「さぁ、そのＧＳをよこしなさい！」
「ユニコーンは、父さんから託された形見。お前達なんかに……」
「渡してたまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
その時、ユニコーンの装甲が割れて紅いフレームが露わになった。そこから一馬の意識は途絶え、病院で目が覚めるまで起きることはなかった。
「――というわけ。話、聞いてくれてありがとう」
「悲しい……過去だね。一馬はそれをこらえて僕のことをあそこま

で…」
シャルルはこう考えていた。
（一馬は、もう両親がいないんだ…僕は、酷くても父親がいるもんね…）
「一馬」
「シャ…！！」
一馬は絶句した。シャルルに抱き寄せられているからだ。
「僕の話を聞いてくれありがとう。でも一馬の方がつらい経験をしてたなんて…」
「あ…」
一馬の眼が光る。
「我慢、しなくて良いんだよ」
「う……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
一馬は押さえていた物全てを放出するかの如く泣き叫んだ。

EPISODE9（後書き）

一馬とシャルルの過去話でした。

【次回予告】

「また二人も転校生！？」

「この学校は転校生のバーゲンセールなのかねぇ…」

「あのごついGSすごいよ！」

「その中で目覚める力とは！」

「次回もお楽しみに！」

EPISODE10（前書き）

ユニコーンの秘密が明らかになります。

EPISODE10

「あ……朝か…」
一馬は朝日で目が覚めた。
「シャルル…」
ベッドの脇でシャルルはすやすや寝ていた。一馬が寝るまで付き添ってくれていたようだ。
「可愛いな…／／／」
昨日の夜、シャルルが女の子ということを知った。男なら何もなく、女の子と分かると意識してしまう。

「一馬君、どうしたの？顔色、悪いよ…？」
教室で簪が心配したのか、声をかけてきた。
「大丈夫、心配しなくて良いから」
「そう…何かあったら言ってね…」

一方一組は。
「今日も…転校生を紹介します。一人目は、韓国代表候補生の鳳城飛鳥さんです」
「鳳城飛鳥です。これからよろしくおねがいします」
韓国代表候補生なのに日本語が達者だ。でも、なんかぎこちない。
「二人目は、ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィッヒさんです」
小柄な体躯。銀色のストレートはどこか威圧感を覚える。眼帯でなおさら。
「あいさつをしろ、ラウラ」
「はい、教官」
教官？ということは…。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ！！！！！」
その一言は何よりもはっきりと、冷徹だった。

「貴様が…」
ラウラはゆっくりと一夏に歩み寄り、その手を――。
がしっ！！
一夏がひっぱたかれる前に飛鳥が腕をつかんでいた。
「あんた、何しようとしたん？いきなり彼の頬をたたこうとしたなんて、無粋すぎひん？」
「はなせ、貴様には関係ない」
捕まれているにもかかわらず、動揺を見せないラウラ。
「関係ないなんて今はどうでもいい！いきなりたたこうとすることにウチは疑問があるんや！」
「鳳城。そこまでにしろ。ラウラ、貴様もだ。席に着け、ＳＨＲを再会する！」

「ありがとう、さっきは」
「いやぁ～ウチは別に何もしてへんけど」
「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」
「ウチは鳳城飛鳥。飛鳥でえぇで。一夏、後ろであんたの彼女さんがお怒りやけど…えぇの？」
後ろを向くとむすっとした箒が立っていた。急いで箒の下へ駆け寄る一夏。
「ごめん箒」
「馬鹿者…だらしなさ過ぎるぞ」
「今日の昼、二人だけで食べないか？」
それを聞いた瞬間箒の目の色が変わった。
「な、何、本当か！！いいだろう、屋上で食べるとしよう！」
「ＯＫ！」
飛鳥はふと廊下に目をやった。
「あれって…」
飛鳥は廊下に出て歩く生徒の肩をたたいた。

「やっほ」
「飛鳥…」
たたいた相手は一馬だった。
「ウチも代表候補生やで。一馬と一緒や」
「懐かしいな、大阪での毎日」
「せやな、あんた、関西弁ぬけてもうてるし」
キーンコーンカーンコーン
「じゃ、また！」
一馬は４組の教室へ戻った。

「あら？」
「え？」
間抜けな声を上げたのはセシリアと簪だった。アリーナには二人だけだ。
「簪さん、こちらにはどのような？」
「機体の…武装試験。自分で組み上げた、武器の調整」
「私でよろしければ相手をして差し上げますわよ」
「うん…、よろしく…」
互いにＧＳを展開して構える。簪の専用機「ストライク」は高機動パッケージ「エールストライカー」を装着していた。
「では参り…」
その言葉は遮られた。モニターにこう表示されていたからだ。
――ＧＳの反応を背後に確認。ロックされています。――
その通り後ろを向くセシリア。そこには一機のＧＳ。装着者は―。
「ラウラ・ボーデヴィッヒ…」
「ドイツ製ＧＳ『セラヴィー』…」
「ほう……イギリスのケルディムに日本のストライク。データで確認したときの方が強そうだったな」
その言葉は挑発なのだろうか。
「あら、出会っていきなり愚痴だなんて、同じ欧州連合として恥ず

かしいですわ。それとも、ドイツの方々はそのような言い方しかできないのですか？」
「戦ってみなくちゃ、解らないよ」
その言葉を聞いたラウラの口元に笑みが浮かぶ。
「では、試してみるか？」
「「望むところ！！」」

アリーナへ続く廊下。そこを一夏と一馬は歩いていた。
「午後の授業って…あ、４組のお前に聞いても意味無いか」
「ははっ、そうだな」
よくある学生の会話。
「ねぇねぇ、今アリーナで代表候補生同士が模擬戦やってるって！」
「へぇ、おおかたセシリアとだれかかもな。言ってみようぜ」
二人はアリーナへ走っていった。

「嘘だろ…」
二人は目を疑った。セシリア、簪の二人が圧倒されていた。疑うようにしたのはこれではない。
「ＧＳから、生命危機警報が出ている…」
そう解った瞬間、二人はＧＳを展開してアリーナの遮断シールドを突き破って戦場へ向かっていた。

「一夏、二人を頼む！」
「了解！」
一夏は負傷し、展開が解除された二人を抱え、観客席まで運んだ。
「織斑君…？」
「一夏さん、無様な姿を、お見せしました…」
「ゆっくり休んで……！？」
一夏の言葉は遮られた。
「ぐぁぁあああっ！！」

ユニコーンの様子がおかしい。純白の装甲の隙間から紅く輝くフレームが露わになっている。
「おい、あれってかなりやばいんじゃ…！」
ユニコーンガンダムデストロイモード。装着者の感情が高ぶり、いわゆるキレた状態になると発動する。ＧＳは絶大なパワーを得るが装着者の意識は発動システム「ＮＴ－Ｄ」に乗っ取られ、ＧＳのシールドエネルギーが０になるか、装着者に呼びかけ、クールダウンさせるまで止まらない。乗っ取られることなく、制御できたときの様子は明らかではない。「止まれ、一馬！」
一夏は呼びかけるが届かない。
「こうなりゃ、直接ぶん殴って止めるしかない！」
ＧＮソードを構え、ユニコーンへ斬りかかるエクシア。ユニコーンもビームサーベルを抜き、対抗した。
「目を覚ませ、一馬！」
「……」
一馬から返事はない。徐々に押され始めたエクシア。
「ちきしょう、もう、どうなっても知らないぞ！ＴＲＡＮＳ－ＡＭ（トランザム）！」
エクシアの機体が紅く輝き、ユニコーンの背後に回った。ビームサーベルを蹴りで落とし、ＧＮビームダガーで機体を斬る。
「自分を…見失うなぁあああ！！」
一夏の目が変わった。何かの輝きを持つ目に。進化した人類の様な目に。
「はっ…！一夏…」
「一馬！？今すぐ展開を解除しろ！システムにまた乗っ取られるぞ！」
「あぁ…」
一馬はユニコーンの展開を解除した。

EPISODE10（後書き）

ユニコーンのNT－Dはこんな感じです。

【次回予告】

「何か緊迫した様子だったね～」

「ユニコーン、ちょっと怖かったね…」

「次回は一馬君の大阪時代が！？」

「次回もお楽しみに！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3435y/

GS～ガンダムシステム

2011年12月24日11時51分発行